

つながりの中でくらす
望まれた人として生きる
自分らしく生きていく



No. 15

2008年1月発行

昨年はお世話になりありがとうございました。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

今年がみなさんにとって幸多き年となりますように！

走り続けた 2007 年でした。走ったために見落としてしまったことがあったと反省すべきことが多くありました。今年は、ゆっくりじっくり皆さんと向き合って活動していきたいと思っています。どうぞ皆さんのご意見をお聞かせください。

秋のレクリエーションイベント報告 その1 みんなで楽しくスポーツイベント

2007年11月11日(日)10:30~15:30

集合・解散：城北市民学習センター スタジオ 行き先：旭公園

協力：千里金蘭大学人間社会学部人間社会福祉コース

参加者 33名

子ども：14名(うち障害児11名)、

ボランティア：14名(大学生11名、短大生3名)

スタッフ：3名(ほうぷ2名、社会人ボラ1名)

今年度、障害児の余暇を充実させることを目的として3回のイベントと2回の一時保育を開催してきましたが、スポーツの秋にちなんだレクリエーションイベントの希望が多く寄せられたため、スポーツイベントを開催しました。春からのイベントや一時保育を通じて出会った子ども達やボランティア達がより親しくなり、子ども達がのびのびと楽しむ時間となり、ボランティア達も活動を通じて考えを深めることができたのではと思います。

千里金蘭大学人間社会学部社会福祉コースの学生さんが企画をしてくださいました。近くの旭公園まで足を延ばして身体を動かして遊びました。お昼ごはんは、各自、500円を入れた財布を持ち、ボランティアと共にスーパーで弁当やおやつなどを購入し、買い物体験をしました。

このイベントと次に報告する保護者向けワークショップのようすは、NHKラジオ第二「ともに生きる」(毎週日曜8:00~)で、11月18日に放送されました。

<ボランティアの感想から>

- ・ 自分達の企画の甘さなどを感じた。全て成功でなくてももう少ししっかりとした段取りや指示を周りのボランティアに出せばよかったと思う。課題や反省点などたくさん話し合い今後活かさなければと思った。
- ・ Hちゃんの担当だったのですが、私になついてくれていたはずが・・・子どもの心は難しいです。今日もとても良い勉強になった。
- ・ 初めはコミュニケーションを取るのが難しく会話に困ったが、途中から手を握って楽しく過ごせた。トイレの介助や食事の介助をしてみて、言葉がけが大切だと思った。
- ・ 最初は手をつなぐのを嫌がっていましたが、公園から帰るときはKちゃんから手をつないできてくれるなど、打ち解けてきたのかなと思った。公園では、滑り台を気に入ってずっとして、遊びながら電車名を口ずさんでいた。公園に行く途中、信号を渡る時は必ず私の腕をつかんでいた。きちんと危ないと判断しているんだなと思った。Kちゃんは好奇心旺盛で、いろんなことに興味関心があるようでした。
- ・ 元気な子どもで、私自身よく動いた。楽しかった。時間が経つのが早く感じた。
- ・ 「一緒にやろう」と誘ってくれたり、笑って話しかけてくれて、車椅子であったけれど、公園でたくさん動きまわった。おもしろそうに、宝探しも真剣に取り組んでいて、楽しく過ごせた。
- ・ 最初すごく不安だった。Yちゃんに初めて会った時、「無理！」って言われて私で大丈夫かな、と思ったが、除々になれてきてくれて安心した。そこで気を緩めてしまったせいか、お昼を買いに行く時、「嫌い！」と言われどうしようかと思った。食べ終わる頃には機嫌が直って、私を名前でも呼んでくれた。本当に嬉しかった。宝探しでは一緒に走り回り、楽しんだ。部屋に帰ってからはボーリングを自分で考えた遊び方でやって楽しかった。
- ・ 自分の担当していた子をみながらも他の子と触れ合うことができるので、大勢の人がいるほうが楽しいと思った。イベント自体は、どのお子さんも楽しんでいて良かった。
- ・ 時間配分に困ったけど、みんな楽しいと言ってくれたので嬉しかった。企画側として無事終わって良かった。



<参加したお子さんの保護者から>

- ・ お姉さんに甘えて、たたいりの意地悪をしたようです。悪いことができるほど「ほうぶ」に娘の居場所ができた、とも言えます。「意地悪をしたあとの気持ちはどうだったの」と、だっこして聞きました。「意地悪した後は、つらくなるのねえ。意地悪したら、あかんなあ」と言うて頷いていました。「ほうぶ」ではなくていい子ぶってきたので、親は安心していたのですが、悪いところも出てきました。帰りにボランティアさんがちゃんと説明に来てくださったので、娘は「ごめんなさい」が言えました。この対応がありがたかったです。豊かに暮らすって、こんなふうには振り回されることも入ってるんだよねえと、やっと思えるようになりました。
- ・ 初参加で、お兄ちゃんは予想通り最初はおもいおもいしていたみたいですが、やがて緊張もとけて楽しく過ごせたようです。親のいない状態で、兄弟で遊びに出かけたのは、ヘルパーさんと近くの公園へ行く以外は初めてです。良い経験をさせてもらえました。弟はヘルパ

一同行での参加でしたが、ヘルパーさんが弟とボランティアさんの関わりをサポートしてくれていたようで、弟とボランティアさんのコンビで過ごせたことをとても嬉しく思っています。時間を決めず部分参加でも良いということが、弟に負担にならない参加となりました。ボランティアさんはおやつや抱っこ、吸引のほんのさわり部分など、いろいろな関わりをもってくれました。弟にとっても嬉しい経験になったと思います。

- ・ 休日は家の中で過ごすことが多く、運動不足になりがちです。みんなでスーパーに買い物に行き、昼食を食べたりできてよかったです。娘は外で大きな声で歌ったりしたので、嬉しかったと思います。家に帰っても、ハイテンションでいろいろと歌っていました。
- ・ 保育所や学校以外で息子を預けるのが初めてだったので不安いっぱいでした。息子の行動を全てプラス志向で受取ってもらったようでありがとうございました。帰りに騒ぐので、疲れたのかな、早く帰りたいのかなと思っていると「まだ遊びたかった～」の叫びでした。
- ・ 昼食代500円持って行って自分で選べるというのが、娘は出かける前から、楽しみにしていました。外での遊びも楽しかったようでした。

<スタッフ振り返り> ～Aちゃんのエピソードから～

お菓子の買出しに行く時、廊下ですれ違ったAちゃんに、「一緒に買い物に行く？」と尋ねてみた。すると、何も答えずにそのまま通り過ぎていったので、買い物に興味がないものと理解した。学習センターを出て、区在宅サービスセンターの横を歩いていたら、後方から「待つて～、待つて～」と叫ぶ声がする。振り返ってみたら、Aちゃんが全速力でこちらに向かって走っている。ボランティアの話によれば、買い物の前にどうしても気になることがあったらしい。この全速力こそがAちゃんの「答え」だったのだと気づいた。スーパーでとても嬉しそうにマシュマロをひとつだけ買い物かごに入れていた。

イベントが終わり、お別れの場面でのこと。困った表情のボランティアさんが「Aちゃんがお菓子を離さないんです」と。Aちゃんのところに行くと、両手でお菓子の袋をしっかりと握っている。お菓子の買い物係りとして、余ったお菓子の行方が気になるのか。そういえば、お礼を伝えていなかった。「Aちゃん、今日はお菓子の買い物係、ありがとうございます。おつかれさまでした。」そう言って、袋の中のマシュマロを手渡すと、安心した様子でお菓子の袋を手放した。Aちゃんが選んだマシュマロが、おやつ時間に配られなかったので、さぞかしガッカリしたことに違いない。

時間の連なりがAちゃんと私とでは違う。けれども、いつのまにか、Aちゃんの時間の連なりのなかに導かれてしまう。子どもとのコミュニケーションの楽しさを実感できた一日だった。

秋のイベント報告 その2

障害児を育てている保護者のためのワークショップ

「自立について考えよう」

2007年11月11日(日) 10:45~15:30

城北市民学習センター 午前：会議室3 午後：アトリエ

参加者 15名 スタッフ：3名

今年度、障害をもつ子どもを育てている保護者の交流会を2回開催し、保護者同士がセルフヘルプ機能をいかした意見交換を行ってきました。保護者交流会の再度開催の希望は多くあり

ましたが、今回は少し視点を変えて意見交換を進めるために、ワークショップを開催しました。今までの保護者交流会の中で、「子どもの将来について考えることができない」「今のことで精一杯」という保護者が多いことから、障害者のさまざまな暮らし方や働き方を知る機会とし、地域で暮らすことの大切さや自立に向けた子育てについて考えるきっかけになればと考えました。

[プログラム]

◆第1部 (10:45~12:00) 会議室3

対談 山口正和氏(大阪府立能勢高等学校教育専門員)

向井裕子(地域生活サポートネットほうぶ)

◆第2部 (13:00~15:30 150分) アトリエ

ワークショップ

講師：鷺尾泰代さん (作業所みらいかん代表)

三ノ浦康介さん (種智院大学2回生)

淵上賢治さん (障害者自立生活センター・スクラム スタッフ)

三輪豪さん (大和総研勤務)

富田都子さん (NPOちゅうぶ スタッフ)

(それぞれに、配偶者、親、サポーターが同行)

ファシリテーター：向井裕子(地域生活サポートネットほうぶ)

午前中は、山口正和さんをお招きして対談形式でお話を聞きました。山口さんは、豊中市の小学校で30年間教員をされ、その間、「障害児」学級及び「原」学級担任として、直接障害のある子どもたちと関わってこられました。その後3年間、病院の院内学級を担当され、2000年から大阪府立の養護学校に勤務、2007年3月に定年退職をされました。現在は大阪府立能勢高等学校で教育専門員をしておられます。

「子どもは子ども同士のかかわりの中で育っていく。そこにその子が居続けることで、いることが『あたりまえ』になる。あたりまえに地域で暮らし、地域の人たちに顔を知ってもらうことが大切」と、さまざまな場面で障害児と関わってこられた山口さんのお話を聞き、地域で暮らすことの大切さを考える時間となりました。また、「障害のある子どもは自分のことが決められないとよく言われるが、周りがそうさせた。子どもと一緒に解決していくことが大切。大人の考え方が子どもの人生を左右してしまう。自分ひとりで何でもできる人はいない。自立は人に押し付けられるものではなく、自分が生きたいように生きること。『愛される障害児』『自分で何でもできる障害児』『迷惑をかけない障害児』作りではなく、周りを巻き込んでいく生き方が大切」というメッセージは参加者の心にしっかりと届いたようでした。

お昼休憩は、保護者同士で食事をしながら自己紹介や雑談をしてミニ交流会が開かれて和やかな雰囲気でした。

午後は、地域で暮らす障害当事者の方々5名からさまざまな暮らし方、働き方や想いを聞きました。鷺尾さんは、養護学校に試験を受けて入った話や就学猶予の話、学校での友だちとの関係、卒業後に自分達(当事者達)で作業所を立ち上げたようすをお話してくださり、生活や介助を普通に関わってくれる人、仲良くしてくれる人を増やしたいと締めくくられました。三ノ浦さんは、保育所、小学校から高校までのこと、大学受験のこと、大学生活についてお話してくださいました。大学は勉強が難しく大変だが、一緒に卒業しようと言ってくれる仲間もできて、バトミントンサークルと介護技術研究会に入り、サークルの友達と飲み会やカラオケに行ったりして楽しいようです。淵上さんは、16歳の時に交通事故にあい、2年間入院の後、17



年間自宅にこもった生活をされたそうです。お母さんが亡くなられ施設を探していた時、ヘルパー派遣事業所を紹介されたことをきっかけに、外に出ることが楽しくなり、その後、自立生活センターでスタッフとして働き始めたそうです。3年前にヘルパーを使いながら一人暮らしを始められ、月に1回くらい病院に駆け込んだり、気管が詰まって息ができなくなって救急車を呼んだりすることもあるが、それでも自立生活は楽しいと力強い言葉でした。三輪さんは、小中学校と普通学級で過ごした思い出や、交流生として過ごした高校のこと、作業所に行きながら就職活動をしたこと、14年前に就職した今の会社での仕事のこと、仕事帰りや休日の過ごし方などお話をしてくださいました。9年位前から暮らしているグループホームでのようすもお話してくださいました。現在、恋人募集中で、将来は結婚して、子ども2人と家族4人で夫婦円満で暮らしたいと夢も語ってくださいました。富田さんは、小中高と養護学校に行き、地域で友達がいなかったのが寂しかったこと、養護学校卒業後、24歳まで親元にいたが、23歳の時に自立生活支援センターのキャンプに初参加した事がきっかけとなり、その後、グループホームに入居。重度の障害をもつ先輩がいきいきと自立生活(一人暮らし)をしているのを見て影響を受け、26歳で1人暮らしをはじめたそうです。自宅にいたときは、暗黙の了解という感じで何をするにしても自分で選べなかったが、自立して、自分で決めていくことは大変なこともあるけど幸せとのこと。ヘルプセンターでコーディネーターとして活動。仕事場で知り合った夫と結婚し、現在、仕事は休み子育てに専念中。「母親の私に障害があっても、外にも連れて行ってるし、当たり前な生活を子どもと夫と一緒に楽しみながら暮らしている。ヘルパーを使って生活・子育てしているので、親としてはこれでいいのかなあと思う部分もあるが、私がいきいきしていたら子どももわかると思っているから、今はカッコイイママになりたいと思っている」と素敵な笑顔で語ってくださいました。

◇ グループに分かれて話し合った内容(一部報告)

- ・ 子どもの意思が理解できないので親の考えだけで進路を決めるような気がするが。
⇒ どういう進路を選んでも、辿り着くところは就職ということになる。
- ・ 子どもにどういう将来を送って欲しいと思うか? ⇒ 自立して欲しい。親離れ・子離れ。など
- ・ 作業所でのようすは? ⇒ 将来の自立につなげられるような経験を積む場所として存在。家事など生活に役立つことや、個人の趣味を深めるなど、さまざまな活動をしている。自分達のしたいことを見つけて、計画し、皆で話し合い、実行していく。学校生活、家庭生活などで足りなかった分を補いながらより良い生活を目指して活動。当事者主体。自己決定を大切に。できるできないということではなく、何か責任をもって取り組む姿勢を大切に、結果は失敗しても過程を大切に思っている。
- ・ 幼い頃、自分の判断で行動する機会が少なかった。子ども達には何かひとつの仕事を任せる機会を与えてやって欲しい。その仕事を任せられ、できたという自信が生きていくうえで大きなプラスになり、生活の質を高められると思う。
- ・ 小学校中学校の思い出は?
⇒ 一番悲しかったのはスクールバスに乗って学校に行くこと。「なんで私だけ(地域の学校に行けないのか)」という思いがあった。楽しかったことは、先生との付き合い。普通校から来た先生で、普通に考えて子どもに応じて答えてくれた。
⇒ 楽しかったのは、友だちが家に遊びに来てくれたこと。今でも会うと声をかけてくれる。悲しかったことはいじめられたこと。いじめられたときには先生に相談していた。
- ・ 親子喧嘩をよくしていたというお話だったが、どのようなことで喧嘩をしたのか。

⇒昔は「外に出たい」「危ない」といった喧嘩もあった。頼むにしてもちょっとした言い方で喧嘩に。最近では少ないが、子どもが産まれて、子どものことに口を出すので喧嘩になる。親の言いなりになっていたら親はそれでいいけど、それではダメだと思う。

⇒しょうもないこと。家出したこともある。でも、知らない間に仲直りしている。

- ・（サポーターの立場からのお話）親の存在が大きいと感じる。小さなうちからヘルパーを使って欲しいと思う。親でないから失敗をする。一緒に失敗をしていく体験はとても大切だと思う。親が本人より先走らないことも大切だと思う。

<参加者の感想から>

●午前の山口さんのお話について

- ・ 自立には仲間がいるという話を聞いて、私も今いろんな人とつながった（仲間）ことによって、「肩の荷がおりたんだなあ」と思いました。仲間・つながりって絶対大事！（「肩の荷」は何を残したらいいか、親が死んでからひとりでどうするのか、ということ）
- ・ 親としては、どうしても迷惑をかけずに…とってしまいがちでした。先生のお話の中で、家族だからこそ遠慮してしまうというのはその通りで、人に任せることも大事だなあと思えました。周りを巻き込んでいくという言葉がとても新鮮だった。
- ・ 自立って人に頼っていいんですね。少し気が楽になりました。
- ・ 最後の保護者へのメッセージのお話の中で、親だと連れて行きにくいところを学校のみんななど連れて行ける、守ってくれる、ということにとっても感動しました。子どもは車椅子に乗っていて、地域の学校に通っていますが、まさにその通りでありがたいです。地域の小学校に行ったら良かったと改めて思いました。
- ・ 先生の出会われた子ども達とのエピソードは改めて地域の中でともに生きていく大切さを感じました。また「何をあたり前とするのか」「母も仲間が必要」「自立は人に迷惑をかけずに生きていくことではなく、人に迷惑をかけようがどうしようが生きていくことではないか…」などの言葉が心に残っています。
- ・ 地域の大切さがよくわかりました。学校を選べない、学校（養護学校も含め）に行かされるという話が考えさせられました。

●午後のワークショップについて

- ・ もっと子どもの意思を引き出す育て方を工夫しなければなあと思えました。親の意志ではなく、自分の意志で生きる子どもを目指して頑張ります。
- ・ 今までわかっているつもりのことも、当事者の方からお話が聞け、説得力もあり、熱くなりました。富田さんの出産も驚きました。
- ・ 鷲尾さんの作業所のお話がすごく勉強になりました。私が「道」を作りすぎないよう気をつけなければと思います。
- ・ 我が子が親のことをどう思っているのか、今はわからないけど、子どもの立場からの意見が聞けて良かったです。
- ・ みなさん、いきいきとしていらっしやると感じました。うちの子どもが自ら望んでそういう生活を過ごせるようになって欲しいです。
- ・ 講師の方々の話で感じたのは、ご本人の方々の強い意志、自立したいという想い、その心を育ててあげるためにはどうしたらいいのか、よりいっそう悩んでしまいます。
- ・ 時間が短くて、まだ話し足りない感じです。自立というテーマは5才の息子には遠い未来

のように感じていましたが、避けては通れない問題であると考えさせられました。

- ・ 5人の講師の皆さんのお話はどれも本当に心に残るお話ばかりでした。親から離れ、自分の人生を歩むことを望まない子どもはいないのでしょね。自分の子ども、他人の子ども、親としての自らに限界を勝手に作ったりしないで、柔らかにチャレンジしていく生活をしていきたいです。
- ・ 子どもの意思をどう受けとめるのかの難しさを実感しました。上手に親離れ子離れしなければと思います。

<スタッフ振り返り>

午前の山口さんのお話は、地域の中で人と繋がって生きていくことの大切さを改めて感じさせられる内容でした。子どもが仲間とともに育っていくことが大切のように、保護者も「ほうぷ」によってつながった仲間達とともに支えあいながら楽しく暮らしていきたいと思います。

午後の当事者の方々のお話は、多くを学ばされるものでした。「自分らしく生きる」とはどういうことだろうと考えさせられました。今回、講師をお願いした時のことです。Mさんが「普通に起きて、普通に会社に行って、普通に寄り道をして帰ってくる。話すような特別なことはないけど」と言われました。そのMさんの「普通」を「特別」なことにしてしている自分を反省しました。当日、Mさんが頬を赤らめながら「夢」を語ってくださったことに感謝です。そして、そのMさんも、子どもの頃からしっかり発言できたわけではなく、歳を重ね経験を重ねてきた今だから語ることができるのだと思いました。我が子と「同じ障害」もなければ「同じ人生」もありますが、障害は違っても、講師の声を我が子と重ね、自らの子育てを省みる時間になったと思います。いろんな生き方があること、いろんな幸せがあること、そして、それは親が決めることではなく、本人が決めていくということを学んだ時間だったと思います。

今回のワークショップのキーワードは、「地域」「つながり」「仲間」だったと感じています。子ども達が自分の人生を自分で決めていくことができるよう、自分らしく生きることができるよう、親として何ができるのか。仲間と一緒に地域とつながって、お互いの子どもがそれぞれの人生を歩んでいくのをともに見守り続けることができればと思います。いつか子ども達が自分の夢を語るように願いながら。そして、参加された保護者の方々自身も、私たちスタッフも、自分の人生を自分らしく生きていければと思っています。



たくさんのお出会いと別れのあった2007年でした。「人間は生まれてくるのも死んでいくのも独り、だから、生きている間は独りぼっちにならないようつながりあっていきたい」と、あるピアカウンセラーの言葉。それぞれがありのままに受け容れられ尊重されて自分らしく暮らしていくことを願って、2008年も「ほうぷ」は地域の中で皆さんと繋がって支えあっていきたいと思っています。

今年、ほうぷスタッフには年女・年男がたくさんいます。よく動き働くのも干支のせい？でも、そろそろカラダにも気をつけていきましょうか…。

